

## JAQG 協賛メンバー訪問 ―三益工業株式会社様―

### 1. はじめに

航空宇宙品質センター（JAQG）は 2001 年の創設から 25 周年を迎えます。この記念企画の一環として、協賛メンバー様への訪問を開始しました。

JAQG では年に一度、活動報告会を行い、多くのメンバーの方にご参加いただいておりますが、各協賛メンバーの方の声を十分に拾い上げられていないのではないか、という問題意識がありました。

本企画は、9100 規格の動向などについて率直な意見交換を行い、協賛メンバーの方の現場の声を拾い上げるとともに、IAQG や JAQG に対して親近感を持っていただくことを目的としており、話しやすい雰囲気となることを心掛けました。訪問先については、昨年度の活動報告会時にアンケートを取り、JAQG 訪問の受け入れをしていただける協賛メンバーの方とさせていただきます。

この企画の第 8 弾として、2026 年 8 月 21 日、三益工業株式会社様（従業員 50 名、航空宇宙分野が売上の 95%を占める部品メーカー）への訪問を実施いたしました。

### 2. 三益工業株式会社様のご紹介

同社は、約 60 年の歴史を持つ、従業員 50 名（男性 37 名、女性 13 名／直接部門と間接部門の比率 6.5:3.5）の会社です。主に航空機エンジンやフライトコントロール（飛行制御）部品を手がけており、売上における航空宇宙分野の割合は 95%に達します。精密機械加工と特殊加工（真空熱処理や非破壊検査など Nadcap 認定を伴う高度な工程）に加えて、MRO 作業を自社内で行う事を強みとしています。また、航空宇宙部品製造の中小企業連携コンソーシアムである「AMATERAS」を中心に、表面処理も含めた一貫加工の取りまとめを行うなど幅広く対応されています。

昨今の航空宇宙業界において、新規案件や増産案件、他社が撤退する際の部品の転注（受け皿）を積極的に引き受け、サプライチェーンの維持に大きく貢献されている重要なポジションを担っています。一方で、「航空宇宙は難しそう、厳しそう」という業界特有のイメージが先行し、深刻な人手不足（人の充足の難しさ）に直面しているという、多くの中小企業が抱える生々しい現状も語られました。ただ、足元では「お金（資金面）の環境は良くなってきた」という前向きな変化も見られます。

当日は同社の品質管理・製造実務の皆様にご対応いただきました。JAQG 側からは、株式会社 SUBARU 航空宇宙カンパニーの高橋伸英様、および JAQG 事務局（SJAC）の城福が訪問いたしました。



左から、岡部課長、田中部長（三益工業）、城福（SJAC）、高橋氏（SUBARU）、中西社長、室井工場長、北條部長（三益工業）

### 3. JAQG 説明およびツールの紹介

対面ならではの空気感のなか、JAQG の活動概要、最新の 9100 規格改定（JIS Q 9100 から「IA9100」への移行動向）、および開発中の中小規模組織向け「9150 規格」の概要を紹介しました。また、品質管理の向上や規格への自己適合確認を助けるデジタルツールとして、OASIS Insight、AIMM（Aerospace Industry Maturity Model）、および SCM H（Supply Chain Management Handbook）の紹介を行いました。



## 4. 意見交換

意見交換の場では、実務での苦労や、規格の解釈・維持における課題等について、意見交換が展開されました。

### 4.1 特殊工程管理における個社スペック

QMS（9100 認証）が導入されたことで、かつては顧客ごとに個別に受けていた監査対応が減ったことに大きなメリットを感じておられました。しかし一方で、熱処理や非破壊検査といった「特殊工程管理」の監査については、サプライヤにとって依然として非常に煩雑であるという実態が指摘されました。Nadcap の導入によって一定の統一化・平準化はされているものの、実際には顧客独自のスペック要求が根強く残っているという、課題が共有されました。

### 4.2 規格改定の解釈について

9100 の改正内容の具体的な解釈をめぐり、「コンサルに聞くべきか、研修機関（テクノファ等）なのか、それとも誰に聞くべきか」という現実的な悩みが共有されました。

審査の席で審査員にアドバイスを求めることは難しいため、相談先に困るということです。また、認証機関や審査員が変わると見方も変わるのではないかという懸念も示されました。

### 4.3 審査・維持コストと品質マニュアルの軽量化

大企業並みの厳格な要求を中小規模の企業にそのまま求められることは大きな負担になるという懸念が示されました。また、認証維持を進めるうちに「品質マニュアルが重たくなり、エビデンス（証跡）も増えてしまう」という課題が上がりました。実務に即した運用を維持するためにも、可能な限りマニュアルを「シンプルに軽量化していきたい」という実務担当者の切実な想いが語られました。

### 4.4 新規格「9150」について

9100 はおろか 9001 も取得していないような小規模な協力会社へ発注しようとする際、この 9150 規格が有効な品質管理の選択肢として使えるようになれば、発注側の管理負担も軽減され、非常に有効なツールになるのではないかという期待が示されました。

## 5. 三益工業株式会社様からの声

この度は、お暑いなか弊社にお越しくださり、誠にありがとうございました。IAQG/JAQG 様の活動内容や要求規格が決まるまでのプロセス、そして、9100 改正の最新動向を中心にご説明頂き、大変参考になりました。自由討議では、打ち解けた雰囲気の中、QMS 維持に対する中小企業ならではの悩みについても忌憚なくお話をさせて頂く事ができました。近い将来に予定されている 9100 の改正に伴い、要求の解釈に戸惑う事が出てくると思われま

すので、講習会の開催や問い合わせ窓口の整備など、情報発信をお願い致します。  
今後も自社の品質向上に取り組んでまいりますので、よろしくお願い致します。

## 6. 最後に

規格改定の解釈や特殊工程管理の重複といった「現場の生の声」を直接伺えたことは、  
JAQG にとっても今後の支援を考える上で、極めて貴重なインプットとなりました。 業務は拡大傾向でありながら人手不足という厳しい環境下において、快く訪問を受け入れ、貴重な生の声を聞かせていただいた三益工業株式会社の皆様に、心より感謝申し上げます。

以上